『わだつみのこえ』日本戦没学生記念会編 2017 年 11 月　147 号　67-75 頁

断想・国家と民衆――丸山眞男の民衆像を中心に

青木　秀男

秋雨が降る神宮外苑で　出陣学徒の壮行会の
行進する隊列のなかに
友の顔の　青ざめて　涙ぐんでいるのを見た

友は征った　と書いた君も　征って　死んだ
すべてが　遅かった

自由主義者には
応召を拒絶して　非国民になる　道もあった
それでも　遅かった

鎖に繋がれた　軍隊で
知性こそ　学徒の　武器だと　抗ったが
ついには　この世の自由を　見かぎって

せめて戦って　いさぎよく　死ぬことが
腐った日本が　自由の日本に　生まれ変わる日を
一日でも　早めることと念じて　敵に突っ込んだ

それが　自由の手形を　死に託した
自由主義者の　慟哭の　最後だった

しかしいま　生まれ変わった　日本で
自由主義者の　慟哭の記憶を　暗殺し
戦争は　もうこりごりと　呟きながら
国民丸ごと　鉄の鼻輪の　屠牛になる

すでに遅いか　まだ引き返せるか
悪魔は　不気味に　年老いている

時代と民衆

日本戦没学生記念会編『きけわだつみのこえ』を教科書に、時代の不安を詠んだ拙ない詩

『屠牛の涙』である。地の底より戦争の足音が聞こえる。特定秘密保護法、安保法制、テロ等準備罪、集団的自衛権。日本は、戦争準備の国家体制を整えつつある。そして、憲法改定（悪）で、戦争の準備は完了する。こうした事態の背景に、政治の全般的な右傾化がある。歴史修正主義、民族主義の鼓吹、保守・右翼の政治家・政党・団体の勢力増大。最後に、それを黙認・受容する国民。もとより、この政治を批判し、抵抗する国民は多い。しかし、それを黙認・受容する国民は、もっと多い。国民の抵抗は、政治を転轍するには及ばない。だから政府は、戦争準備ができている。

時とともに、戦争を知らない世代が増える。かれらが戦争を知るには、想像力が必要となる。知る必要も感じず、想像力もない者は、批判も抵抗も不要である。ゆえに、戦争準備に無力である（そして加担する）。戦争と（戦後の）困窮を知る世代は、まだ多い。かれらは、戦争と困窮を想起するたびに、「戦争はこりごり」と思う。しかしその多くは、記憶を封印し、「現実政治」を前に、それとは知らずに、あるいは「戸締り」論に騙されて、政府の戦争準備を黙認・受容する。

ゆえに、今必要なのは、次のことである。眠れる国民、騙される国民を批判すること。国民の批判は、政府の批判よりむずかしい。批判の矛先は、わが身にも迫る。戦争を知る世代は、戦後、「（政府に）騙された」といって、戦争責任を自己免罪した。しかし、千万を超える人間を殺した戦争に加担しておいて、騙されたはなかろう。ましてや、この先、また騙されたなどとは、口が裂けてもいえまい。それは、厚顔無恥、死者の冒涜というものである。

これが、筆者の時代認識である。それを胸に収め、小論は、国民（以下民衆）の精神構造（丸山眞男の用語）について考える。そのために、戦後すぐ、民主化の国民運動の只中で、主体なき民衆を批判した丸山の主張を一瞥する。そしてそれを、今の民衆を評定する材料となす。

精神構造

「日本の知識人たちが、日本独特の『皇道』神話における粗雑きわまる信条に鼓舞された盲目的な軍国主義ナショナリズムの奔流を、結局は進んで受けいれるにいたり、あるいは少なくとも押しとどめるのにどれほど無力であった、という事態はなぜ生じたか」（松本、一九九七、二〇五）。この問いが、戦後の知識人の出発点であった。丸山は、日本のファシズムと国体(一)を批判し、それらを超える国家と人間の条件を模索した。そして、知識人・政治家・民衆が「自由な主体意識」（植手、一九九五、三六六）を持つことの必要を説いた。筆者も、その主張に倣い、政治の主体たりえず、恐る恐る政治に追随した、近代民衆の精神構造を分析した（青木、二〇〇六）。

丸山は、知的支配層（知識人・政治家・軍人・官僚）の精神構造を分析した。そして、東京裁判の被告軍人の答弁を聞き、そこに、国家機構のなかで上位者に抑圧された者が、その鬱屈感を下位者へ委譲して解消する「抑圧の委譲」（丸山、一九四六、三二）と、その結果、上位者から託された責任を下位者に委ねて、自らの責任を免れる「無責任の体系」（丸山、

一九四九、一四一）をみた[二]。そして、国家の頂点にあった軍人に自律性の欠如をみた。同時に、その精神構造は、民衆のものでもあった。「今次の戦争に於ける、中国や比律賓（フィリピン）での日本軍の暴虐な振舞についても、その責任の所在はともかく、直接の下手人は一般兵隊であったという痛ましい事実から目を蔽ってはならぬ。国内では『卑しい』人民であり、営内では二等兵でも、一たび外地に赴けば、皇軍として究極的価値と連なる事によって限りなき優越的地位に立つ。市民生活に於て、また軍隊生活に於て、圧迫を移譲すべき場所を持たない大衆が、一たび優越的地位に立つとき、己れにのしかかっていた全重圧から一挙に解放されんとする爆発的な衝動に駆り立てられたのは怪しむに足りない」（傍点は原文）（丸山、一九四六、三三～三四）。「鉄の檻」に囚われ、自律できない民衆。そこにこそ、知的支配層が形成した天皇制イデオロギーを受容し、戦争に加担した民衆の（没）主体があった。民衆は、国家の理念と価値を受容して、「鉄の檻」を生きた。丸山は、民衆の心の内を分析しなかったが、彼の精神構造論を民衆のそれとして読むことは、十分に可能である。

丸山の民衆像

丸山によれば、知的支配層が形成した天皇制イデオロギーは、（旧）中間層を介して一般民衆に伝達された。天皇制イデオロギーは、民衆に受容されてこそ、国家統合に機能する。だからこそ、そうならないためには、民衆は、国家に対して自律的でなければならない。それが、「真の近代国家」の基盤である。「認識としては多少問題があっても、妥当性の高い判断をなし得る自由なる主体としての民衆の共同的な想像力を『下から』形成する『作為』を生み出すことこそが喫緊の課題だと認識し、その課題に答えることを丸山はかれのプラクティスの主題に据えた」（菅、二〇〇四、六六）。そこには、民衆は封建的な意識に囚われた人々であり、民衆に自律性を促すのは知識人だという認識があった（「精神的貴族主義」）（斎藤、一九九八、二四）。丸山は、概略、このように民衆を捉えた。しかしそこで、丸山批判が現れた。二つ取り上げよう。

丸山批判

吉本隆明は、民衆はそれ自身の生活史のなかで生きる人々であり、日本軍の兵士の戦場での残虐な行動は、丸山が考えたような、理念やイデオロギーに影響された結果ではなくて、民衆の日本的な存在様式の変遷のなかにその原因を解く鍵があるとした（吉本、一九八七、二二一～二二五）。吉本は、民衆の「日本的な存在構造」「民俗的な部分」を強調した。そしてそれらは、理念やイデオロギーに左右されず、それどころか、時には支配の様式をさえ決定したと主張した。しかし、この「日本的な存在構造」「民俗的な部分」とは、何だろうか。それは、吉本の「共同幻想論」（吉本、一九六八）に繋がる精神世界であろう。いわば民衆の精神構造の深層論であろう[三]。吉本は、兵士の精神構造の現実態を分析しなかった。そして深層論から、丸山を批判した。しかし、理念やイデオロギーに影響されない民衆とは、理念やイデオロギーによってだけ動く民衆と同様、仮構の民衆像でしかない。日本兵（民衆）

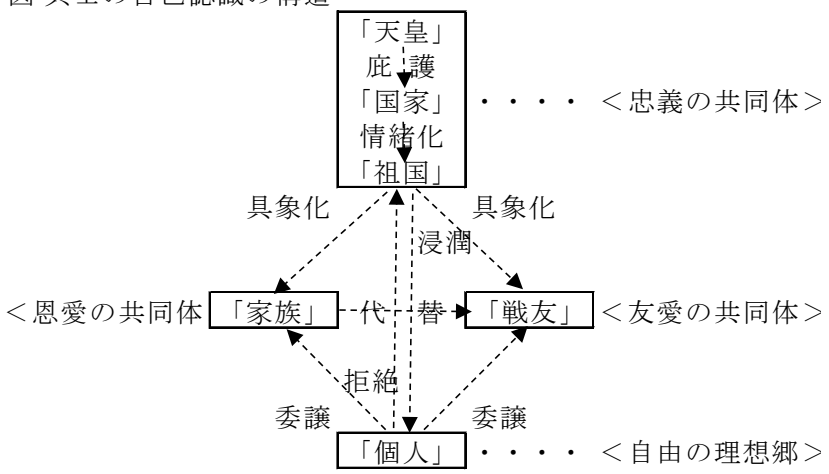
の残虐行為は、天皇制イデオロギーが抑圧された精神を把捉した産物である。その限り、丸山の主張は間違っていない。ここで、L・アルチュセールの主張を想起する。国家は、民衆を丸ごと把捉する巨大な「イデオロギー装置」（Althusser、一九九五）である[四]。

安丸良夫は、丸山は、民衆がもつ抵抗と変革の契機を看過し、また、部落共同体の理解も一面的であると批判した（安丸、二〇一三、二七九～二八二）。共同体は、丸山が指摘するように、天皇制支配の基盤であり、国体の細胞をなした。しかし他方で、共同体は、民衆の抵抗の拠点であり、その抵抗により社会は前進してきた。その時、民衆は、共同体の論理やイデオロギーのもと、（ある程度までは）自覚的にその責任を負うことができた。安丸は、このように主張して、丸山の民衆・共同体像に、民衆の創発性と共同体の抵抗性を対置した。しかし、このような安丸の主張にも、疑問がある。まず、安丸の丸山批判は、外在的な批判に留まった。丸山の関心は、もっぱら、天皇制イデオロギーを受容した民衆と、国体を支えた共同体（原理）を分析することにあった。安丸は、丸山の主張を覆すものではなく、それに民衆と共同体のもう一つの側面を加えただけである。次に、安丸が言うように、民衆に創発性があり、共同体に抵抗性があるとするなら、どうして民衆が丸ごと戦死を厭わず、共同体が「ムラを挙げて」戦争に協力したのだろうか。安丸は、この事実をどう説明するのか。この痛苦な事実を受け止め、そこから出発してこそ、戦争加担の主体的な反省が可能になる。その主体的な反省にこそ、民衆の創発性がある。当の丸山は、「家族＝郷党意識がすなおに国家意識に延長されないでかえって国民的連帯性を破壊する縄張根性を蔓延させ、家族的エゴイズムが『国策遂行』の桎梏をなす場合も少なくなかった」（丸山、一九五一、六九）と指摘した。丸山は、捩れた形ではあれ、国家に対する共同体の「抵抗性」を認めていた。しかしそれは、丸山にとって第二の主題であった。

兵士の自己認識

丸山の民衆像と、それを批判した吉本・安丸の民衆像には、通底する問題点がある。それは、民衆が天皇制イデオロギーを受容し、戦争に加担した過程を、民衆の精神構造に分け入って分析しなかったことである。たとえば、図は、一つの精神構造（自己認識の構造）像である。兵士は、四つの共同体を行きつ戻りつ、生きた。

図 兵士の自己認識の構造



民衆は、天皇制イデオロギーを受容して兵士になった。そこには二つの動機があった。一つ、家族への情愛である。兵士は、国家から家族を守るために戦争へ行った。「家族には最愛の人々がいる。家族は私を育み、私の魂が帰る場所である。戦争に負ければ家族が辛い目にあう。だから私は、家族を守らなければならない。私が卑怯者になれば、家族が辛い目にあう（家族は国家に人質にとられている）。だから私は、逃げるわけにはいかない」（青木、二〇〇八、七九）。丸山もそのことを指摘した。「国家は自我がその中に埋没しているような第一次グループ（家族や部落）の直接的延長として表象される傾向が強く、祖国愛はすぐれて環境愛としての郷土愛として発現する」（傍点は原文）（丸山、一九五一の二、六七）。しかし丸山は、祖国愛が郷土愛・家族愛として発現する過程は分析しなかった。

二つ、〈敵〉への恐怖である。兵士は、〈敵〉から家族を守るために戦争へ行った。「『天皇』は『国家』の庇護者（親）であり、兵はその臣民（子）であった。『国家』は『祖国』を守る主体であり、『祖国』は『国家』の情緒的表象であった。戦争に負ければ、〈敵〉の侵略を許す。そうなれば、愛する縁者が住む祖国が喪われる。美しく優しい故郷が蹂躙される。愛する家族が酷い目に遭う。だから祖国を守られなければならない」（青木、二〇〇八、七九）。兵士にとって、天皇は家族の庇護者の表象であり、「天皇陛下万歳」は「祖国万歳」であり、「家族万歳」であった。その対極に〈敵〉がいた。こうして兵士は、天皇制イデオロギーを自らの利害関心に合わせて翻訳し、また〈敵〉を創造した。そこに、恐る恐る戦争を容認して、それを自らの生活世界と調整し、納得する兵士の姿があった。

兵士の他者認識

筆者は、日本兵が戦地中国で書いた手記・遺書・日記・手紙等をテクストに、彼らが中国人（将兵と住民）に抱いた認識構造を類型的に描いた（青木、二〇一一）[五]。「兵士の戦争受容の類型は、戦争で『守る』もの、正確には『守るものを失なうことの恐怖』の類型である。またそれは、他者（敵）に媒介された自己認識である。『忠義の共同体』に生きる兵士

は、『東亜協同体』の義を信じる兵士である。彼らにとって中国人は隣人（指導されるべき『弟』）である。『恩愛の共同体』に生きる兵士は、〈敵〉から『家族を守る』ために戦う兵士である。彼らにとって中国人は恐怖の人々である。『友愛の共同体』に生きる兵士は、『戦友の仇を討つ』ために戦う兵士である。彼らにとって中国人は復讐の相手である。「閉鎖的集団における対内道徳と対外道徳の分裂、外部集団に対する恐怖と侮蔑、尊大と自卑のコンプレックスがしばしば対外国感情にも表現された」（丸山、一九五一の一、九五）。最後に、『自由の理想郷』に生きる兵士は、戦争を否定し、〈敵〉との戦いに躊躇する兵士である。彼らにとって中国人は人間同胞である。こうして、自己認識（戦争受容）は他者認識（中国人認識）となる。他者認識の基底にはこれがある」（青木、二〇一一、一九）。そして、兵士の他者認識の底には、日本近代のアジアに対する排外的な精神構造があった[六]。

戦前と戦後

戦後日本の思想は、知識人の戦争責任を問うことから出発した。丸山は、戦前・戦後にわたって、天皇制国家批判の立場を取った。丸山は、日本の敗戦を喜んで迎えた。「日本軍国主義に終止符が打たれた八・一五の日はまた同時に、超国家主義の全体系の基盤たる国体がその絶対性を喪失して今や始めて自由なる主体となった日本国民にその運命を委ねた日でもあった」（傍点は引用者）（丸山、一九四六、三六）。丸山は、国家に対して自律的な民衆の登場を期待した。しかしその期待は、すぐ崩れた。丸山は、戦後も、日本人の精神構造が、自律性を欠いた旧態依然にあることを洞察した。「敗戦とともになされたという価値転換という神話が、『近代』をめぐる認識視点の連続を覆い隠して」（子安、二〇〇三、一八七）いた。戦前のイデオロギーが、「量的に分子化され、底辺にちりばめられて政治的表面から姿を没し」（斎藤、一九九八、六）ただけであった。丸山は、そこに、ただ時代の趨勢に迎合するだけの民衆を見た。「戦後の一挙的に反転する状況のなかで、天皇制国家に翼賛したのと全く同一の思考の型で革命運動への加担がなされてゆく可能性が憂慮され、そうなるとすれば、それもまた精神の荒廃にほかならない」（菅、一九九七、三一）。

戦後の民衆の精神構造を批判した点で、丸山は、戦後民主主義に懐疑的であった。しかしそれでも、丸山は、戦後民主主義の擁護者であった。その結果、丸山は、戦後民主主義に「裏切られた」と思う戦後世代の人々の批判に晒された[七]。たしかに丸山は、仮構の国家像を抱く危うい国家主義者であった。戦争での民衆の苦難に言及しなかったし、アジアの被害者（中国人や朝鮮人）の存在を看過した。それは重大な問題である。しかしだからといって、丸山の主張を、丸ごと積極的・意図的な排外主義だったと断じるのは、どうであろうか[八]。批判者の批判が、批判の準則に則って検証される必要がある。

小論は、丸山の民衆論を一瞥し、丸山批判の一部をめぐる断想である。丸山の民衆の自律性論には、今なお重要な意義がある。国際化時代の今も、日本人の精神構造は変っていない。とはいえ、丸山の民衆論は、まだまだ貧困である。丸山思想の何を継承し、何を超えるべきか。丸山の仕事は、批判も反批判も、時代診断の原点であり続けている。

注

（一）　国体とは、一般に、主権の所在により特定される国家の形態を指す。日本では、戦前、天皇制国家を指す語として、この語が用いられた。

（二）　映画『ハンナ・アーレント』は、アドルフ・アイヒマンの裁判陳述を聞いて、このユダヤ人虐殺の責任者が、行為の意味を問わず、自らの職分をこなすだけの小官僚でしかなかった、思考を停止すれば誰でもアイヒマンになりうるとして、「悪の凡庸さ」を説いた。この話からすれば、権力の委譲や無責任の体系は、ドイツにもあったことになる。

（三）　北沢方邦は、丸山は、歴史はプラクシス・意識的実践のみによって創造されるとする近代の歴史意識を重視したため、民衆の無意識的行動（プラティーク）、慣習の歴史創造力を看過したと批判した（北沢、二〇一〇、三〇四～三〇六）。これも、吉本の丸山批判と同系列にある。

（四）　「これら（イデオロギー～引用者）の装置は、暴力に訴えることなく、見かけ上は『それだけで』機能するのではあるが、しかし実際は、暴力とは異なる方法で、つまりイデオロギーによって、あるいはむしろイデオロギー化によって機能するのである」（傍点は原文）（Althusser, 1995:127）。

（五）　兵士の他者認識の類型枠組については、（青木、二〇一一、一三）をみられたい。

（六）　吉本は、中国やフィリピンにおける日本兵の残虐行為は、真善美の体現者である天皇の軍隊として究極的価値を保証されていると考えたために起ったのではなく、その残虐の様式自体が、天皇制の存在様式を決定する民俗的な流れの中にあったとした（吉本一九八七、二二五）。では「民俗的な流れ」から、どのように残虐行為が出たのか。吉本は、その過程を説明していない。

（七）　戦後民主主義が民衆の自律性を育まなかった結果が、現在の政治状況である。

（八）　ポストモダン派による丸山批判については、あらためて議論したい。

参照文献

Althusser, Louise, 1995, *Sur la Reproduction*, Press Universitaires de France, Paris.
（『再生産について――イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』、西川長夫他訳、平凡社）

青木秀男、二〇〇六年、「近代民衆における自立の構造――加賀象嵌職人の場合」、『社会学評論』、日本社会学会、五二巻一号、一七四～一八九頁

青木秀男、二〇〇八年、「殉国と投企――特攻隊員の必死の構造」、『理論と動態』、特定非営利活動法人社会理論・動態研究所、一号、七二～九〇頁

青木秀男、二〇一一年、「戦地に潰えた『東亜共同体』――日本兵の感情構造」、『わだつみのこえ』、日本戦没学生記念会、一三五号、四～二四頁

菅孝行、二〇〇四年、『九・一一以後――丸山眞男をどう読むか』、河合文化教育研究所
北沢方邦、二〇一〇年、「今、なぜ丸山眞男を批判するか――戦後民主主義批判」、『環　歴史・環境・文明』、藤原書店、四三号、二九八～三〇八頁
子安宣邦、二〇〇三年、『日本近代思想批判――一国知の成立』、岩波書店
松本三之、一九九七年、「主体的人格の確立をめぐって――丸山の思想についての一考察」、『駿河台法学』、駿河台法学編集委員会、一〇巻二号、二〇三～二三八頁
丸山眞男、一九四六年、「超国家主義の論理と心理」、『丸山眞男集』、岩波書店、一九九五年、三巻、一七～三六頁
丸山眞男、一九四九年、「軍国支配者の精神形態」、『丸山眞男集』、岩波書店、一九九五年、四巻、九七～一四二頁
丸山眞男、一九五一の一、「戦後日本のナショナリズムの一般的考察」、『丸山眞男集』、岩波書店、一九五五年、五巻、八九～一二二頁
丸山眞男、一九五一年の二、「日本におけるナショナリズム」、『丸山眞男集』、岩波書店、一九五五年、五巻、五七～七八頁
斎藤純一、一九九八年、「丸山眞男における多元化のエートス」、『思想』、岩波書店、八八八号、四～二五頁
安丸良夫、二〇一三年、「一七　近代日本の思想構造――丸山眞男『日本の思想』を読んで」、『安丸良夫集、六　方法としての思想史』、岩波書店、二七一～二九〇頁
吉本隆明、一九六八年、『共同幻想論』、河出書房新社
吉本隆明、一九八七年、「丸山眞男論」、『吉本隆明全集撰　四　思想家』、大和書房、二〇三～二八一頁

※小論は、次の論文の抜粋とリライトである。

青木秀男、「国体と民衆――丸山眞男の政治思想について」、『部落解放研究』、広島部落解放研究所、二〇一五年、二一号、四七～六七頁